

森のようちえんにおける子どもへの教育効果

～保護者アンケート及びインタビューを通して～

杉山 浩之*・牧 亮太**・黒田 愛乃***

Educational Effects of Children in the Forest Kindergarten: Through the Interviews and Questionnaires for Teachers and Parents

Hiroyuki SUGIYAMA*, Ryota MAKI** and Yoshino KURODA***

はじめに

本研究は、日本における森のようちえんの教育効果を、そこに通う子どもたちの保護者への質問紙アンケート調査を中心にして明らかにすることを目的としている。

筆者たちはこれまで森のようちえんを視察し、そこに通う子どもたちは、特に寒い冬でも森で活動して過ごし、斜面のある場所で遊ぶことで運動能力や体力が特に発達すること、20人程度の異年齢集団で助け合い協力し合い遊んだり過ごしたりすることから思いやりや気配りなど心の面でも大いに育って来ていることなどが分かり、さらに保護者の感想や保育者の発言からも理解を深めてきた。

そこで、森のようちえんに通う子どもの保護者を通して、子どもたちの成長や変化を明らかにするためにアンケートを行った。

質問紙アンケート調査の対象としては、これまでに視察経験のある森のようちえんから選択した。すなわち、広島市安佐南区沼田の「戸山の森のようちえん おてんとさん」(園児数14人、

保育スタッフ3名、今田夫妻および藤本さんによる主催者型)、同じく安佐南区の「森のようちえん まめとっこ」(同9人、保育スタッフ2名、石井さんと保護者ボランティアを中心とする共同保育型)、鳥取県伯耆町・大山町で展開する「森のようちえん みちくさ」(同13人、保育スタッフ3名、新妻夫妻を中心とする主催者型)、同県智頭町の「森のようちえん まるたんぼう」(同29人、西村代表、保育スタッフ5名の主催者型)および「杉ほっくり」(同14人、熊谷さんを中心とする保育スタッフ3名の主催者型)、さらに長野県安曇野市の「安曇野 森の子」(同20人、元保護者を含め保育スタッフ3名の主催者型)、山梨県の「森のようちえんピッコロ」(同29人、中島さん及び保護者スタッフの共同保育型)、計7園の保護者(128人)に対して行った。アンケート用紙の配布および回収は、それぞれの「森のようちえん」に依頼した。回収期間は、11月2日～20日とした。回答数は98名分、回収率は、76.6%であった。

また筆者の一人(杉山)は、2015年6月25日鳥取県の森のようちえん「みちくさ」の保護者にインタビュー調査(注3、朝のお迎えの時間1時間程度)を行った。次に、6月26日に智頭町の「まるたんぼう」保育者たち(注4、約2

* 本学教授

** 本学専任講師

*** 本学助手

時間)、さらに6月27日に「まるたんぼう」の保護者(注5、親子参観日の保育に並行して約2時間)にもインタビューを行った。これらは、アンケートの分析・考察を補足する形で活用することにした。

アンケート結果の分析と考察

(1) 子どもの年齢構成および男女比

森のようちえんに通う子どもの年齢構成および男女比を明らかにするために、年齢、男女による割合を算出した(表1)。森のようちえんの子どもたちは年少・中・長がほとんどであるが、3歳児を迎え、随時入園できるという園もある。今回のデータとしては、5歳児以上が約半数である。また、森のようちえんと言っても決して男児が多いとは限らず、ほぼ同数であると言って良い。

表1. 年齢別、性別に見た子どもの割合

	3歳	4歳	5歳	6歳	計
男児	12.2	14.3	17.3	8.2	52.0
女児	6.1	16.3	20.4	5.1	48.0
計	18.4	30.6	37.8	13.3	100.0

(2) 森のようちえん以外での遊びや学び～電子ゲーム機器と習い事

次に、森のようちえんに通う子どもの実態について、一般の幼稚園や保育所に通う子どもとの比較を行った(表2、表3)。森のようちえんに入園する過程の教育環境として、いわゆる携帯型ゲーム機器を所有する子どもは一般(未就学の6歳児まで所有率約30%というデータがある、注1)よりも極めて少ないことが分かる。ここにはないが、テレビを所有していない、あるいはほとんど見ないという家庭も少ないと、まるたんぼう代表の西村さんが今回のアンケートで補足してくれた。また、習い事に関しては、

約20%と一般(スポーツ系のみで約50%、注2)よりも低い、ある森のようちえんのスタッフからは、保育園並みの預かりということで平日は習い事はしないということ、また保育料が4万円という一般ようちえんよりも高めの保育料で習い事は経済的な面から控えるということもあるようである。

表2. ゲーム機を所有している子どもの割合

	森のようちえん	一般(6歳児)*
所有率	7.1	29.7

*一般のデータはベネッセ教育総合研究所(2013)による

表3. 習い事に通う子どもの割合

	森のようちえん	一般(5歳児)*
割合	20.4	49.3

*一般のデータはベネッセ教育総合研究所(2009)による

(3) 入園動機

森のようちえんに子どもを入園させるにあたって保護者がどのような期待を持っていたのかを明らかにするために、表4に示した11項目の中から入園動機として当てはまるもの上位5項目について「1位」「2位」「3位」「4位」「5位」が分かるように回答を求めた。上位5項目として選択された割合およびその順位ごとの内訳をまとめたものが表4である。

表4から入園動機を見ると、「自然とのふれあい」が最も多く約90%となる。その次が、「感性」(約70%)、「健康」(約60%)である。「人間関係」「創造力」「個性」がそれに続いている。さらに、「自然とのふれあい」に次いで1位(17.3%)が多い「その他」の自由記述からの分析を見ると、多い順に、①「自分で考える力」、②「生きる力」、③「思いっきり遊ばせたい」であるが、これらのことが一般的な幼児教育機関

表4. 入園動機として選択された割合およびその内訳（選択率の大きい順）

	選択率	内 訳				
		1位	2位	3位	4位	5位
自然とのふれあい	86.7	37.8	16.3	9.2	11.2	12.2
感性	69.4	8.2	16.3	19.4	16.3	9.2
健康	62.2	8.2	15.3	8.2	16.3	14.3
人間関係	48.0	8.2	14.3	12.2	7.1	6.1
創造力	46.9	4.1	4.1	14.3	16.3	8.2
個性	42.9	2.0	6.1	10.2	9.2	15.3
忍耐力	37.8	7.1	8.2	8.2	4.1	10.2
運動能力	21.4	3.1	4.1	6.1	5.1	3.1
集中力	12.2	0.0	1.0	4.1	4.1	3.1
知性	8.2	0.0	2.0	1.0	2.0	3.1
その他	27.6	17.3	2.0	6.1	0.0	2.0

では得られないと考えて、森のようちえんを選んだのであろうと推測される。

また入園動機と関連して、保護者の自然体験の有無「自然体験が豊かにあったか」を示したものが表5である。母親の方が子ども時代の自然体験が父親よりも高いということは、母親の子ども時代の自然体験が入園動機に肯定的な影響を与えているということが推測できる。なぜなら一般的には男児の方が自然体験が多いと予想されるからである。

表5. 幼児期に自然体験が「あった」と回答した親の割合

母親（95名）	74.7
父親（85名）	64.7

(4) 教育効果～子どもの変化～

次に森のようちえんの教育的効果を明らかにするために、森のようちえん入園後の子どもの変化について保護者に尋ねた。質問項目は独自に作成した24項目であり、「健康」「人間関係」「言葉」「環境」「造形表現」「音楽表現」「総合力」の7領域に分類することが可能であった

(表6)。各質問項目に対し、「非常に良くなった」「良くなった」「変わらない」「悪くなった」「分からない」の5つの選択肢から最も当てはまるものを選択するよう求めた。項目ごとに選択された回答の割合を算出したところ、表6に示した通りとなった。7割以上の保護者が「非常に良くなった」あるいは「良くなった」と回答した項目は、「健康」領域で5項目中2項目（「瞬発力」「持久力」）、「人間関係」領域で6項目中2項目（「自己発揮」「思いやり」）、「言葉」領域で2項目中1項目（「自己主張」）、「環境」領域で3項目中3項目（「自然への興味」「自然の知識」「観察力」）、「造形表現」領域で4項目中1項目（「ものづくりへの興味」）であった。「音楽表現」領域での成長を感じている保護者は3～4割、「総合力」領域では6割前後であった。これらの結果から以下の事が考察できる。

- 1) 「言葉」領域、「人間関係」領域、「環境」領域、「健康」領域などの変化（成長）が大きいということが分かる。これは、領域別の項目の差の違いを超えているものである。
- 2) 「自己主張」は、言葉と同時に、子どもの自

表6. 親が感じる子どもの変化

領域	質問項目	良くなった※ ¹	変わらない	分からない	無回答
健康	健康	60.2	26.5	1.0	12.2
	瞬発力	74.5※ ²	9.2	2.0	14.3
	持久力	79.6	9.2	0.0	11.2
	食欲	65.3	21.4	0.0	12.2
	生活リズム	52.0	33.7	0.0	13.3
人間関係	自己発揮	75.5	12.2	3.1	8.2
	自己抑制	57.1	24.5	7.1	10.2
	自立	64.3	18.4	2.0	13.3
	思いやり	75.5	10.2	3.1	11.2
	トラブル	32.7	36.7	13.3	12.2
	傾聴	56.1	29.6	2.0	12.2
言葉	自己主張	86.7	6.1	0.0	7.1
	質問	60.2	19.4	5.1	15.3
環境	自然への興味	75.5	14.3	1.0	9.2
	自然の知識	79.6	9.2	1.0	10.2
	観察力	75.5	11.2	0.0	13.3
造形表現	ものづくりへの興味	74.5	13.3	2.0	10.2
	色への興味	38.8	41.8	5.1	14.3
	絵の細かさ	45.9	36.7	3.1	14.3
	絵の大胆さ	49.0	28.6	8.2	13.3
音楽表現	音への敏感さ	41.8	32.7	11.2	14.3
	リズム感	35.7	36.7	13.3	14.3
総合力	あそびの多様性	59.2	22.4	5.1	13.3
	あそびの深まり	64.3	16.3	5.1	14.3

※1 「非常に良くなった」「良くなった」を合算した割合

※2 「良くなった」70%以上、「変わらない」30%以上、「分からない」10%以上の値を網掛けで示した

信や積極性（自立）という点での成長を表したものであろう。「自己発揮」と共通しているとも言える。「トラブル」については、自己主張や自己発揮の成長があれば、子どもたちの集団内での衝突や摩擦である「トラブル」は避けられない。「トラブル」を解決する過程で子どもたちは「思いやり」を育み、「自立」して成長していく。

3) 「環境」領域の項目が全て挙がったことは、自然環境というものが子どもに相当の影響を与えていることを物語っている。

4) 「表現」領域の変化・成長がほかの領域に比べて低いということは、森のようちえんのおける子どもたちの活動を物語っているようである。つまり、このように現れた段差は森のようちえんでは「表現」領域の活動が少なく、

結果として相対的に変化・成長があまり見られないということが一般的な傾向としてあるということであろう。

さらに、どのような点において大きな成長が見られたのかを明らかにするために、24項目の中から最も変化が大きいもの上位5項目を選択するよう併せて求めたところ、上位5項目として選択された割合は表7に示した通りとなった。3割以上の保護者が上位5項目として選択した

のは「持久力」「自己発揮」「思いやり」「自己主張」「自然への興味」「観察力」の6つであった。これらの結果から以下の事が考察できる。

1) 表6と比較すると、「ものづくりへの興味」以外の項目は全く同じである。上でも述べたように、森のようちえんは、一般の園のように一斉に造形活動を行うなうことは、季節行事などで行う以外は例外的であり、自由遊びの中で行われる造形活動の活動量の差もある

表7. 親が感じる子どもの変化として上位5項目に選択された割合およびその内訳

領域	質問項目	選択率	内 訳				
			1位	2位	3位	4位	5位
健康	健康	22.4	6.1	2.0	3.1	4.1	7.1
	瞬発力	28.6	7.1	4.1	7.1	6.1	4.1
	持久力	36.7	9.2	14.3	3.1	6.1	4.1
	食欲	19.4	7.1	3.1	2.0	3.1	4.1
	生活リズム	15.3	4.1	2.0	3.1	4.1	2.0
人間関係	自己発揮	36.7	8.2	5.1	8.2	5.1	10.2
	自己抑制	20.4	3.1	4.1	3.1	3.1	7.1
	自立	26.5	7.1	6.1	6.1	4.1	3.1
	思いやり	39.8	7.1	11.2	7.1	6.1	8.2
	トラブル	10.2	2.0	3.1	1.0	2.0	2.0
	傾聴	18.4	1.0	2.0	7.1	3.1	5.1
言葉	自己主張	40.8	6.1	7.1	10.2	10.2	7.1
	質問	16.3	1.0	1.0	5.1	7.1	2.0
環境	自然への興味	33.7	8.2	7.1	6.1	8.2	4.1
	自然の知識	29.6	8.2	6.1	8.2	2.0	5.1
	観察力	37.8	3.1	10.2	15.3	6.1	3.1
造形表現	ものづくりへの興味	20.4	4.1	2.0	2.0	5.1	7.1
	色への興味	5.1	0.0	0.0	2.0	1.0	2.0
	絵の細かさ	7.1	0.0	1.0	1.0	4.1	1.0
	絵の大胆さ	11.2	1.0	2.0	3.1	3.1	2.0
音楽表現	音への敏感さ	7.1	0.0	0.0	2.0	2.0	3.1
	リズム感	6.1	1.0	0.0	1.0	2.0	2.0
総合力	あそびの多様性	14.3	1.0	2.0	2.0	4.1	5.1
	あそびの深まり	14.3	1.0	1.0	5.1	6.1	1.0

※選択率30%以上の項目を網掛けで示した

ことから、このような結果が出ていると推測される。その結果、上の分析とまったく同じように、「言葉」領域、「人間関係」領域、「環境」領域、「健康」領域などの変化成長が大きいということが分かる。これは、領域別の項目の差の違いを超えているものである。

2) 表6の分析結果の2)、3)、および4)の考察は、ここでも同様のことが言える。

子どもの変化を尋ねた問いでは、24項目以外を選ぶ場合に、「その他」の選んだ場合の自由記述がある。それらを分析すると以下の事が言える。

- 1) その他の自由記述は、①健康・体力、②社会性・思いやり、③五感・感性、④自律・自信、⑤工作・想像・創造に分類された。
- 2) ②の社会性・思いやりに関することでは、正義感、おやつのシェア、表情の読み取り、考えた行動、家での手伝いなどで行動の変化がみられた。
- 3) ③五感・感性については、味覚、季節の変化、自然の面白さ、言葉の表現、虫が好きに、変化への気付きが早いなどで行動の変化がみられた。
- 4) ④自立・自信については、気持ちの切替、我慢強さ、表情の充実感、自尊心、活発化、やり遂げる力、責任感、乗り越える力などで行動の変化がみられた。
- 5) ⑤工作・想像・創造に関することでは、発想・空想力、物づくりへの興味、絵画・工作の創造性、手先の器用さ、遊びの多様さなどで行動の変化がみられた。

鳥取県のみちくさ及びまるたんぼう（杉ぼっくり含む）の保護者のインタビューでの子どもの成長に関わる内容と照らし合わせてみると、みちくさでは、「健康」領域と心のやさしさ（思

いやり、人間関係領域）が、まるたんぼうでは、健康領域、観察力（環境領域）、自己発揮（人間関係領域）、自己主張（言葉領域）が挙げられる。これらは、上のアンケート結果とも共通した結果を示していると言える。

おわりに

以上のように、森のようちえんの子どもたちの変化（成長）を中心に保護者アンケートから分析・考察してきた。子どもたちの変化（成長）について要約すると、以下のとおりである。

1) 相手の気持ちを考えて行動することができる。

「思いやり」の気持ちが成長したと感じている保護者が多い。相手がどう思っていて、何を求めているのかに気づくことができると考える。それは、森のようちえんの理念にもあるように、大人がすぐに介入せず、子どもたち同士の関わりを見守るところから、子どもたちは、大人からの評価を気にすることなく、友達と関わる事ができているからである。子ども同士の関わりの中で、困っている友達には手を差し伸べたり、楽しいことを共有し合ったりできる。自分がされて嬉しかったことは、友達にもしようと思える。森のようちえんでは、そのような深いかわりをする事ができると考える。毎日を一緒に過ごす中で、「友達」から「仲間」という意識に変わっていくのではないかと。森のようちえん「おてんとさん」のスタッフが「子どもたちは友だちと仲間をいう言葉を使い分けている。森のようちえんの子は仲間、家に帰ってから地域などで付き合うのは友だちというように」と話していた。20人前後の小さな集団で最長3年間過ごすことで、人間関係の濃い絆が子どもたちの中に生まれても不思議ではないで

あろう。

2) 自然の変化に対して敏感になる。

「観察力」「自然への興味」が上位にある。自然の中では、毎日様々な変化が起こる。昨日まで咲いていた花が散った、雨が降って昨日までは無かったはずの川ができていたりなど、子どもたちが「あれ?」「不思議だな」と思うことがたくさんある。一般的な保育室の中では、物の配置が決まっていて整頓されているため、大きな変化はない。一方、自然の中では、昨日と全く同じ環境をつくることはできない。自然事象の微妙な変化に子どもたちの鋭い感性がさらに磨かれていく。センス・オブ・ワンダー（驚きの感性）の心を持った子どもたちは、「あれ?」と思ったことに対して、「もっと知りたい」「なぜ?」と、物事を追求し、観察する力が身につく。その「あれ?」「不思議だな」という小さな変化に気づくことが、生きる力に繋がると考える。

3) 自分を表現できるようになる。

「自己主張」「自己発揮」が成長しているという点から、自分を表現ができるようになると考える。森のようちえんの子どもたちは、自ら判断し、主体的に活動をしている。それは、大人の見守る姿勢があるからこそである。失敗してもそれを受け止めてくれる仲間がいる、嬉しいことは一緒になって喜んでくれる仲間がいるという、「受容」の環境の中で活動することができるからである。大人がどの子どもについても、子どものすべてを受け入れてくれている、そして私の事をちゃんと見てくれている。そして受け止めてくれていると思えるような心地よい環境を作ることが大切である。そのような環境の中で伸び伸びと活動することによって、次

は自分が周りの仲間の事を受け止めようという気持ちが芽生えるであろう。次の事は多くの森のようちえんで実施していることである。視察の朝、その日の活動場所を子どもたちが話し合うという場面を観察した。みんな行きたい場所が違っていたが、それぞれみんなが場所を選ぶ理由を付けて「今日はここに行きたい」と自己主張していた。ただ自分の意見を言うだけでなく、周りの意見も受け入れながら活動場所を決めていくという姿があった。そのような対立の中でも「受容」の関係の中にあることが自己肯定感の育みにも繋がると考えられる。

最後に「森のようちえんの教育効果」についての今後の課題を挙げ、本稿を閉じることにしたい。

- 1) アンケート回答から「森のようちえんに通う子どもたちの保護者の考え方の変化」の分析を行い、森のようちえんに通う子どもの保護者の成長や子どもの家庭生活・教育への実態について考察すること。
- 2) 一般の幼稚園の園児の変化成長との比較を行い、森のようちえんにおける子どもの変化（成長）の相違点を明らかにすること。

注

- 注1 http://berd.benesse.jp/up_images/research/nyuyoji_media_all.pdf#search
(ベネッセ教育総合研究所、乳幼児の親子のメディア活用調査報告書、2014年。最終閲覧 2016年1月20日) 6歳児401名のうち、携帯型ゲーム機器の所有率29.7% (2013年3月、郵送法調査、調査範囲：東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県。)
- 注2 http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikuhi/webreport/report05_04.html#zu5_7
(ベネッセ教育総合研究所、最終閲覧2016年1月20日) 2009年3月、インターネット調査で1,030名の5歳児の場合、スポーツ活動49.3%、芸術活動30.5%、教室学習活動19.8%など。

注3 森のようちえん みちくさの子どものお迎え時の保護者インタビュー（6月25日、7:30～8:30）

鳥取県「森のようちえん」認証制度がスタートした2015年度は、定員を18名としたが、6月現在では13名がいる。年度途中も転勤などで出入りがある。現在、福島からの移住者も1名いる。従来からの常勤スタッフ2名に加えて、パート保育者が1名雇用されている。

今の所、市町村からの補助無しで、県からの補助金と保護者からの保育料で経営していくことになる。保育料（夕方17時までの預かり）は、月4万円である。全員が送迎希望であるが、送迎費は保育料に含まれている。早帰りは、3,000円引きとしている。現在は全員が17時までの預かりを選んでいる。連絡帳で子どものことを情報交換している。毎学期末の保護者懇談会は重要な打合せであり、子どもの成長や課題をお知らせし、次の学期の目標や家庭教育についての要望を伝えることにしている。

みちくさは、2013年度は試行期間として、初め、週二日でスタートし、3日、4日、そして5日へと伸ばしていった。2014年度は、毎日型でスタートし、卒業生を3名送り出した。3名の様子は、問題なく、運動会でもしっかりとやっていたとのこと。入学式では、校長先生の顔をしっかりと見て、話を聞いていた。町の広報誌に写真が掲載されていたようである。今年は、卒園児と保護者のキャンプを在園児と保護者達とも合同で開きたいとのことである。

この日は、朝7時半からみちくさ送迎バスに同乗し、米子市内を巡回した。一人の父親を除いて母親ばかりであったが、3人にインタビューした。

- 1) 二人の兄弟を入れている母親は、兄はもともと優しい子であったが、更に優しい子になっているとのこと。身体的にも精神的にも全体が強くなったようである。風邪をひかないし、ひいても直ぐに治るとのこと。
- 2) 体育大学卒のアスリートの母親は、一人娘（年少）をこの4月に入れたが、一人で遊べるようになったとのこと。前はよく甘えて一人では遊べなかったようである。疲れることがない。夜は朝まで熟睡している。前よりも優しくなったとのこと。
- 3) 3人目の母親は、高校教師（家庭科）であるが、車をハイブリッドに買い換え、倉吉市から家族で引っ越してきて、入園した。母親は1時間以上かけて高校に通動している。夫も同様に倉吉に通動。3歳児で入園したばかりである。下にも子どもがいる。いずれ入園するのであろう。覚えた植物の名前をよく教えてくれるそうである。

注4 まるたんぼう・杉ほっくりの保育者たちとの懇談会（6月26日19:00～21:00）での保育者インタビュー

テーマ「森のようちえんにおける子どもの成長と保育者としての思い」

- 1) 森のようちえん出身生は、新しいことに慎重な動きがある。先を予測し、成功できないものには挑戦しないのか。森のようちえんの子どもの自分は軸にして選んでいる。教えられて学ぶ子どもと比べて学び方が異なるので、動きにくいという心理的な抵抗があるのだろうか。

- 森の中では保育者と子どもは同等である。まるたんぼうでは、子どもたちに先生と呼ばせるのではなく、ニックネームで○○ちゃんと呼ばせてきた。子どもとフラットな関係でいたいからである。母親たちの共同保育から始まったまるたんぼうの教育風土である。このことと上のことは関係がないだろうか。
- 2) 見守り保育について、子どもの育て方には、塩加減（本人の自発性を重視して見守ること）と砂糖加減（保育者が助けること）の按配があるだろう。塩と砂糖は両方がある、それぞれが生かし合うもの。子どもの何を見るのか。子どもの何を守るのか。保育者は子どもの行動を見て子どもの内面を見つめる。そこから、子どもが何を考え、何をしようとしているのかを洞察する。そして、子どもの成長への援助を考える。その時、保育者は子どもの全存在を守り、居場所を守り、自己主張を守り、可能性を守り、未来を守る。

- 森のようちえんの出身生は、幸福度の高い子どもではないか。自尊心、自己肯定感の高い子ども。喧嘩を見守るのは、子ども同士一人ひとりの自己主張と交渉を見て、それぞれの発達過程を見守るということ。自育の場を保障するということ。

- 3) マンション暮らしの子どもの母親が子どもの成長のバランスを考えて森のようちえんに入園させて来る。多動ということは発達欲求でもあると思われる。自然体験欠乏障害の子どもの多動や集中力の低さと呼応する話である。

- 恵まれない子どもこそ森のようちえんで育てる必要があるが、そうした母親は進学しか考えていない。大人こそが変わる所、それが森のようちえん。何が大人を変えるのか。入園して間もなく変化する子どもを見て親が変わる。子どもがどんどん変わっていくことを見て、子どもを信じて待つ保育を理解し始める。肩の荷を下ろす親がいる。

- 4) 森のようちえんの子どものは、好き嫌いがなくなる。週一回のペースで、野菜を持ち寄りの味噌汁を食べているからである。

- 5) 森のようちえんの子どものは、絵を描くときに、細かいところまで描く。小学校で描いた子どもの絵を見ると、三人ともそうした絵を描いていた。それは自然の中で観察力が養われている証拠ではないか。リングとみかんを識別する程度の観察力しか育てて

いない学校教育とは異なる森のようちえんの教育の特徴が現れていないか。

- 6) 森のようちえんの子どもは、けんかで怪我をさせることがないのではないか。自己コントロールが出来るからである。森の中の遊びで、我慢強さや忍耐力が身に付いたり、相手を思いやる心が育つたりするので、相手と対立してけんかをしているときでも、自分を見失うことなく、相手を傷つけることがないのではないか。
- 7) 森のようちえんの子どもは、リーダーシップを発揮することが多い。初めから引張って行く子どもというよりも、周囲から認められてリーダーになる子が多い。
- 8) OB会をした時のことである。冬、雪の中でたき火をしようと計画していた。卒園児たちは行きバスの中でぶつぶつと積極的な話をしていなかったが、いざ到着すると、やる気満々で、こちらが圧倒されて後からついていくという感じになったことがある。
- 9) 森のようちえんでは、自分のペースで活動できることがいい。一人で居たいときは一人で居られる。そうして自分を取り戻し、集団に戻る。一斉教育の場ではこういうことは難しい。これは自分を見つける時間となる。自分の納得のいく行動がとれるようになる。それは、自信や自己肯定感へとつながる。
- 10) 女子は非常に複雑で精神的に育ちが早い。女には女兒というものは無い。女子は既に女である。男は鼻くそを掘っている。相撲取りをしている場面で、女子ははじめ冷静に見ているが、男子からも一緒にやることを要請されると、しかたがない、やってやるかという雰囲気になり、本気になって、勝負すると、男子よりも強いのである。

注5 まるたんぼうの参観日保育での保護者インタビュー（6月27日10:00~12:00）

まるたんぼうの保育参観日で、そちらへ合流する。朝の会が拍子木の合図で始まる。「あの橋が落ちる前に」を歌いながら体を動かしてレクをする。点呼は、家族でどんな子を出すかの相談タイムを設ける。いろんな声の工夫をして一周回る。西村山への散歩が始まる。保護者と話しながら歩く。途中、ぐみの木が熟した実をたくさんつけており、そこで30分以上とどまって、子どもたちが木に登り、お互いに助け合って食べ続ける。何人かの家族は西村山へ移動する。

私もぐみの木の下に潜り込み、ぐみを少しいただく。女子に取ってあげると「少し酸っぱかった」と控えめに話す。そのさり気ない優しい話し方には取って来てありがとうという感謝の気持ちと同時に、決してお世辞や嘘は言わないという子どもらしさがあると感じた。その子はその後、ママシ草があることを教えてくれる。

指さして「これ触ったらかぶれるよ」と控えめで優しい話し方で。

西村山は、ログハウスが立っているが未完成で止まっている。人手が足りないとのこと。冬までには完成したいと保護者の一人が言う。

数人の保護者のインタビューを以下報告する。

- 1) 保護者（別の森のようちえんの保育者）
 - ・散歩のとき、歩くばかりの一般保育施設の子どもに対して、森のようちえんの子どもは、道端で必ず何かを見つけ、じっくりと観察できる。しかし、一般保育施設では、立ち止まって何かを見ようとしても、保育者が早く行くように急ぎ立ててしまう場合がある。せっかく森に入っているのに、そこで音楽を流し、遊び、自然観察はそこそこで引き上げてしまうことがあるようだ。
 - ・暑さや寒さへの抵抗力も異なっている。冬は昼食を屋内で食べると午後は外へ出ないのが一般の子ども、外へ出るのが森のようちえんの子ども。
 - ・森のようちえんの子どもが小学校へ行くと、何でも先生が基準になっているので驚いている。一般の保育施設から来た子どもが「先生に言っとく」とか「先生が悪いと言ったから悪い」と言っている。
 - ・子どもが何か傷つくと一寸したことで謝る保育者がいるが、保護者もおかしくなっており、保育者もそれに対応せざるを得ない状態がある。
- 2) 兄と妹をまるたんぼうで育てた保護者（母親、公務員）
 - ・兄は小3であるが、学校の話し合い場面では人と異なる意見を言える子で先生も助かっていると聞いている。何かの役割を決めるときでも積極的に手を挙げるとのこと。6年前はまだ森のようちえんも知られていなかったから周囲からは異端児のように思われたが、今では珍しい存在ではなくなっている。周囲が驚くほどではない。選択肢として存在が認められている。
- 3) 保護者（父親、大学教員）
 - ・4月に入園したばかりの年少女兒であるが、自分の考えをしっかりと言ったり、甘えたりすることが減ったり、2か月で大きく成長している。
- 4) 都内からのUターンの保護者（父親）
 - ・妻の判断で入園をして今では年長であるが、期待以上に子どもが成長したと思っている。都会では得られない自然環境で子どもがこうした活動をすることは人として育つために不可欠であると思う。
- 5) 年少女兒を入園している父親
 - ・やっとなれて家でも園のことを話すようになってきた。初めは弁当も食べられなかったし、朝別れるときは泣いていた。今では、活発になり、強くなっている。

6) 県外からの移住で、年子の男子2名を入園させた
保護者

・父親は県外に残したままであるが、子どもを育て
るのはここしかないと考えて引っ越してきた。子

どもは良く育っているし、今後の成長が楽しみで
ある。

以上